

## コムソフィア賞を受賞して

—佐島直子助教授(『現代安全保障用語事典』編集代表)

この度、母校上智大学より「第15回コムソフィア賞」を頂戴した。過去の同賞受賞者は、石澤良昭現上智大学学長をはじめとする偉大な先輩方ばかりであり、その栄誉の大きさに目もくらむ思いである。

受賞対象となった業績は、昨年私が編集代表として刊行した『現代安全保障用語事典』(信山社)である。したがって、今回の受賞は私ひとりのものではない。私の非力さを補って余りある強力な共著者(丸茂雄一、岩本誠吾、関井裕二、田岡俊次、今泉武久)に負うところが大きい。まずは謝して労いたい。

また、専修大学という理想的な「教育・研究」の場を与えられてこそその受賞と心得ている。2001年4月の奉職以来、お世話になった専修大学関係各位に、改めて御礼申し上げる。

“不健康”だった安保論議—あるべき姿への一歩

さて本事典は、安全保障に関わる国際情勢、法制度、経済、戦史などと網羅的に概説する日本で初めての事(辞)典であり、そのパイオニア的内容が過分なご評価につながったようだ。賞状の一文には、「安全保障論議のための基盤をまとめ、世に提示した貴女の努力の結晶は、日本のジャーナリズムに一石を投じるものであ(る)」と記されている。

この点に関し、事典の「はしがき」で私自身は、次のように述べている。

〔(前略)過去、同種の事(辞)典がなかなか刊行されなかった理由は、第二次世界大戦後の日本が抱えてきた安全保障上の根幹的な問題点と無縁ではないように思う。つまり、安全保障に関わる「事(辞)典」という広領域の編纂を、政治的、思想的な立場を超えて多くの執筆者が共同作業をするのは不可能であつたらうし、政治思想を同じくする専門家集団による執筆では、内容が著しく偏向してしまうからである。(中略)

実際のところ、第二次世界大戦後の日本において、「安全保障を巡る議論」は長く不健康なものであつた。

その第一の理由は、「日本国憲法」の平和主義の理念と「冷戦」の文脈の中で現実的妥協の産物として誕生した日米安全保障体制の基本構造から自ずと生じる矛盾に関して、常に慎重な政治的配慮が必要だったからであろう。その結果、日本の防衛態勢の具現化に際し、国会は憲法解釈を中心とした「神学論争」の場となり、安全保障研究の多くが法解釈を中心とした「教条主義」に陥った。

第二に、冷戦の二極対立構造がそのまま国内の政治体制に持ちこまれた日本では、安全保障に関する両者の政策上の現実的な歩み寄りが不可能となった。巷の政策論議には空疎な「理想主義」が蔓延り、安全保障の現実から遊離した。その一方で、中央官庁の一員である防衛庁は安全保障政策の立案とは無縁な「自衛隊管理庁」と揶揄された。

第三に、平和的アプローチを志向する学界は軍事に関わる研究を極端に排除したため、戦争研究や戦史研究の発展が著しく阻害された。これらの専門家は極めて限定されたサークルの中で、自己増殖を続けた。

第四に、第二次世界大戦後、米国を主体とした連合国軍の占領政策において、日本では軍事や戦争に関わる語(句)の使用が厳しく制限され、独立達成後もメディアによって長くそれらが踏襲された経緯も見逃せない。これによって日本人の思想は「閉ざされた言語空間」に封じ込められ、国際常識を踏まえた自由闊達な「戦略的思考」を自ら抹殺してきた。

いずれにせよ、日本の安全保障を巡る議論は、寄るべき立場によって、ばらばらなまま、いたずらに時を



授賞式パーティーでの佐島直子助教授=左  
(鶴田俊正名誉教授=右端=も駆けつけた)



さじま・なおこ＝  
防衛庁国際室渉外専門官、防衛研究所主任研究官を経て  
本学経済学部助教授。専門分野は国際政治学、地域安全保障

経、いつまでも成熟しなかった。

こうした過去の「つけ」は、大きい。

安全保障問題のパラダイムが大きく転換しようとしている今日でも、日本では、賑々しくも「不整序で危うい」議論が、巷間跳梁跋扈している。(後略)

実際のところ、安全保障については、研究はおろか、議論することさえ憚られる社会状況の中で、私自身、長く暗闇を手探りで進んできた。『現代安全保障用語事典』の刊行も、それ自体奇跡のような出来事だったと言わざるを得ない。そのうえ多くの理解者を得、コムソフィア賞まで頂戴しようとは夢想だにしなかった。来し方を思うと感涙に耐えない。

しかし同時に今、改めて行く道を見つめるとき、身が震えるような重責を感じる。

このうちは、生涯かけて、日本の、アジアの、そして世界の安全保障のあるべき姿を追究していきたい。

#### コムソフィア賞

国際問題などの分野に貢献し、優れた業績を挙げた上智大学の卒業生に贈られる。

## エクステンションセンター公開講座

### 「寺子屋Ⅲ」で江戸時代の古文書を読む

エクステンションセンター主催の公開講座「The寺子屋Ⅲ～枳形庵(初級)と専修塾(中級)」が開講されている。

枳形庵で学ぶのは初めて受講する39人。江戸時代の古文書をテキストに、まずは古文書の文章を読めるようになることと、当時の村の仕組みなどを学習する。専修塾では27人が、神奈川県内の町人や村人たちが書き残した古文書を読みながら、江戸時代の村社会の具体像を描いていく。講師は初級を青木美智男文学部教授と内田鉄平さん(大学院博士後期課程3)が、中級を青木教授と小林風さん(同)が務める。

大和市在住の58歳の男性は「徐々に理解出来るようになってきた。ミステリーを読み進めるようなワクワク感があり面白い。学習意欲が刺激されます」と感想を話した。



内田鉄平さん



小林風さん

## 国際経済学科公開講座

### 「グローバル時代の発展途上地域」

「グローバル化時代の発展途上地域」を統一テーマとした国際経済学科主催の公開講座が5月28日からスタートした(6/25を除く毎週土曜、7/16までの全7回開催)。

第1回は飯沼健子助教授が「ジェンダーと開発—近年の展開と新課題—」をテーマに講演。約100人が熱心に聴講した。講演に先立ち室井義雄教授が「世界では、とりわけ1990年前後の頃から、経済の自由化、政治の民主化というグローバリゼーションが急展開する一方で、発展途上国では今なおさまざまな問題を抱えている。本講座では、そうした現状とその解決策を、本学の各地域の研究者が解説していきます」と、開講の目的を話し、あいさつした。

飯沼助教授は、ジェンダーの定義、各国の認識普及度、発展途上地域のジェンダー格差で生じた諸問題、グローバリゼーションの影響や新たな課題について解説。近年誕生したジェンダー支援事業や取り組みを紹介した。講演後は会場から活発な質疑が出された。



飯沼健子助教授

## 大学院法学研究科

### 日本行政書士連合会から研究生を受け入れ

大学院法学研究科(高木侃研究科長)では、昨年に引き続き、日本行政書士連合会(宮内一三会長)の研修に協力している。5月7日から33人が、法律学応用特論(家事審判法/民法の親族・相続=家永登法学部助教授担当)、同(行政救済法=晴山一穂法科大学院教授ほか担当)を科目等履修生として学んでいる。



開講式であいさつする高木侃法学研究科長

## 嶋根ゼミが初の国際交流セミナー

文学部嶋根克己ゼミに学ぶ学生、特別聴講生と他大学に学ぶ留学生がさまざまなテーマで研究発表する初の国際交流セミナー(国際交流センター共催)が5月20日、生田キャンパスで行われた。

テーマはNGO、移民、地域まちづくり、マスメディア問題など多岐にわたり、活発な質疑応答が展開されるなど有意義な報告会となった。報告者とテーマ、コメントーターは次の通り。(敬称略)

▽社会再生時のNGOの役割(横山順一=文4)コメント高橋幸子=院文修1)▽地域住民が語る戦後の地域発展とまちづくり(カク秋香=東京大学教育学研究科特別研究生、北京外国語大学日本学研究中心)コメント今野裕昭教授▽1990年の入国管理法改正と日系ブラジル人問題(ポリーヌシェリエ=本学特別聴講生、リヨン第2大学政治学院)コメント小野澤真美=文3▽「メディア」は誰の手によって作られたのか—日本の市民メディアの担い手の実態分析(何環=東京大学情報学環外国人研究生、北京大学大学院日本学研究中心)コメント嶋根克己教授



質問に答える何環さん(左)

## 進む高大連携

### 教育交流に関する研究協定 狛江高校と締結

高校と大学間における教育交流として、都立狛江高校との幅広い相互交流を目的とした「教育交流に関する研究協定」が3月31日に締結された。高校生が大学の授業を聴講生として受講するほか、「高校生のための大学生セミナー」への参加などが予定されている。4月19日、松本隆狛江高校長と、日高義博学長が、生田キャンパス学長室で懇談し、今後の検討課題などを話し合った＝写真下。



生田キャンパスを見学に訪れた  
今年度の聴講生たち



本学では、すでに神奈川県内の5高校と協定を結んでおり、今年度の聴講生は12人。刑法総論や心理学概論など88科目の中から自分の興味に応じた科目を真剣に学んでいる。

### 海老名高校と「部活動交流」で技術指導

昨年度から高大連携の協定を結んでいる海老名高校と、今年度は部活動を支援する「部活動交流」がスタート。初年度は依頼のあった次の体育会7部が、技術指導や練習見学などさまざまな形で交流を図っていく。

○剣道部○バスケットボール部○卓球部○バレーボール部○野球部○陸上競技部○少林寺拳法部